

佳作

## ぼくの感動

茨城県 日立市立河原小学学校六年 木下 颯太

ぼくは、小学六年生になって初めて人生の「きろ」というやつがあらわれました。ぼくにとってはものすごく大きな決断をしなければいけません。それは何かというと、ぼくが柔道を続けるために学区外の中学校に行くのか。それとも小学一年生からずっとクラスがいっしょだった友達と同じ中学校へ行くのかです。ぼくの小学校は海が近くにあっている所です。ずっと一クラス同じ仲間だけど、他の学年の子たちとも仲良しです。ぼくはマイペースすぎてベンキょうとかかたづけが苦手だけど先生や友達がんばりをみとめてくれます。

マイペースのぼくだけど小学四年生から柔道をはじめました。はじめたばかりの時はやる気がないわけじゃないのにおこられてばかりでした。きつい「きそ練」についていくのは今でもせいっぱいで

です。だけどフィジカルで向かっていく柔道が好きです。それだけじゃなくて柔道の先生は心身ともにきたえるために練習をがんばること、それから相手がいってできる柔道は他人への「けいい」と感じの気持ちが大変だと教えてくれました。

マイペースが許されない柔道でたまにメンタルブレイクしながら必しに練習をしています。練習に行きたくない時にはとにかく練習に行きます。少しずつできないことができるようになってきました。まだまだできないことはたくさんあるけど、試合の時にはぼくが練習でがんばっていることの全部を本気でこめます。負けるかもしれないけど、本気でやります。大きい声を出します。勝った時には「わあっ!!!」と先生とかあちゃんのかんせい之急に聞こえます。「あきらめなくてよかった!」と感じるいっしゅんです。

六年生になってからいっしょに柔道をやっている中学生の先ぱいが「同じ中学校で柔道やらないか?」とさそってくれました。最初は「できないよ」とことわりました。うちの姉ちゃんと同じようにクラスの友達と進学する中学校へ行くと思っていたからです。でもその中学校には柔道部がないです。

それから少したつと団長から柔道部のある中学校へ行かないかとかあちゃんが言われました。ぼくは苦しくなりました。いやだけど柔道をしたくないことは考えられませんでした。すごくなやんでいたけど、団長に、

「自分の答えは出ているだろ。」  
と言われました。

ぼくと同じように中学校からちがう学区へ行くかもしれない、ゆいいつの友達に話をしました。

「みんなとはなれるのイヤじゃないの?」

友達は、

「友達じゃなくなるわけじゃないよ。」

と言っていました。学校で先生や友達とすごしてきたことを思い出しました。それがぼくにとって大事な物だと分かりました。それがぼくにとっての感動です。大事な物を持ってぼくのすべてをかけて中学校で柔道をします。